

言語指導段階内容表を活用するためのガイドライン（難聴学級担任向け）

聴覚障害児への言語指導

聴覚障害児に対して特に配慮して指導すべき内容の一つとして言語指導という指導内容があります。聴覚に障害があると、音声言語が明瞭に聞こえないために文章を聞いたり読んだりして理解する能力や助詞や接続詞などの使い方が定着しなかったり、理解できる言葉がなかなか増えないということが見受けられます。

言語指導では聴覚障害があるために自然に獲得することが困難な上記のような内容を主に取り上げています。言語指導を通して獲得させようとする能力は健常の人間にとって自然に獲得できる能力なので、初めて聴覚障害児への指導に携わった方にとっては必要性が理解しにくい指導内容であると同時に聴覚障害児にとって非常に重要な指導内容だと言えます。

言語指導段階内容表について

1 目的

幼稚園、小学部での文型を中心とした系統的な言語学習の一つの指標とする。

2 基本的な考え方

子供の言語発達を見ると、4歳までにおよそ2000語の言葉を獲得し、日常生活でのやり取りが不自由なくできるようになる。しかし、聴覚に障害がある子供の場合は、係わり手である大人が意図的なやり取りを行う中で言葉の習得を図っていかなければ十分な言語発達は難しい。そのため、子供の実態に合わせ、系統的に言語学習を行っていくことが大切である。そこで、当校では、幼稚園から小学部修了段階までの言語指導の基盤となり指標となるものを作成することとした。（平成13年度作成。

14、15、18年度見直し改善）

実態把握の結果から重点的に指導を行う段階（以下:重点指導段階）の把握方法

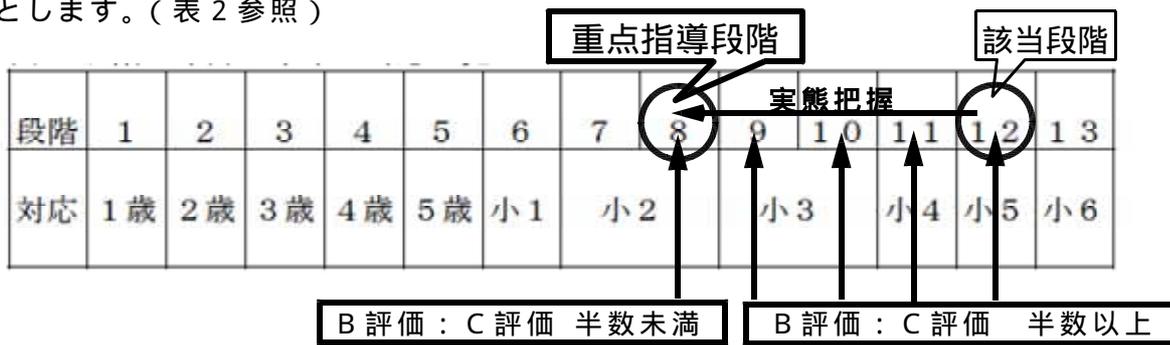
ここでは言語指導段階内容表の指導項目について実態把握を行った結果、言語指導段階内容表中の13の指導段階の中のどの段階を重点指導段階として取り上げるかを説明します。

段階	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
対応	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳	小1	小2		小3		小4	小5	小6

「表 - 1 年齢・学年と言語指導段階内容表における段階との対応一覧」

対象児の学年に該当する段階（該当段階）から実態把握を開始します。（表1および表2参照）実態把握の結果その段階の中でB評価：C評価（評価基準についてはを参照）の指導項目が半数以上の場合、下の段階についても実態把握を続けて行います。最終的に一つの指導段階の中でB評価：C評価の指導項目が半分を下まわった段階を重点指導段階

とします。(表2参照)



「表 - 2 小学校5年生の場合の実態把握による重点指導段階の絞込みまでの流れ」

実態把握の方法と指導で取り上げる優先度について

実態把握では言語指導段階内容表に掲載されている一つ一つの言語指導項目についてどの程度、定着しているか実態把握を行います。

その際に、言語指導項目に該当する表現が対象児の会話や対象児が書いた文章で定着していればA評価：日常生活の中で十分に達成している。(話せて書ける。)と判断できます。指導において取り上げる優先度は低いと言えます。

会話や書いた文章から確認できない場合はチェックシートを活用する方法があります。チェックシートは言語指導項目において取り上げられている内容が理解されているかを選択肢式の質問を用いて便宜的に確認する方法です。

チェックシートで正解した言語指導項目の表現については、B評価：場の条件や内容によって達成している。(話せる、書ける。)と判断できます。指導においては、その言語指導項目の表現が表出されるような場面や使うことが妥当な場面を設定し、対象児に使用することを促しながら日常での定着を目指す必要があることから、指導において取り上げる優先度は若干高くなります。

会話や書いた文章からも言語指導項目に該当する表現が確認されず、また、チェックシートを活用した実態把握でも正解にならなかった言語指導項目は、対象児にとって理解されていない言語指導項目でありC評価：達成していない。(話せない、書けない。)と判断できます。指導において取り上げる優先度は最も高いと言えます。

実際に言語指導段階内容表を活用して指導を行うまでには上記の方法で実態把握を行い述べたように重点指導段階を絞り込み、その段階中のB評価、C評価の言語指導項目を指導で取り上げることとなります。なお実態把握の結果は言語指導段階内容表の右端に記入します。年度始と年度末における結果を記入できるように二つの枠が設けてあります。(表4参照)

難聴学級における実際の活用について

その1 (通常の言語指導段階内容表の活用方法に準じた場合)

実際に難聴学級担任が対象児に対して初めて、で述べた方法で実態把握、指導項目の優先度の確認、重点指導段階の絞り込み、を行った場合、指導を開始するまでに時間がかかることが考えられます。

また重点指導段階の中で同じB評価、同じC評価の言語指導項目同士でどれを優先させ

て指導で取り上げるか迷うことが考えられます。そこで言語指導で取り上げる優先順位を整理しました。(表3参照)

順位	言語指導項目
1	格助詞に関する指導項目
2	順接, 逆説の接続詞, 接続助詞に関する指導項目
3	準体助詞に関する指導項目
4	形式名詞に関する指導項目

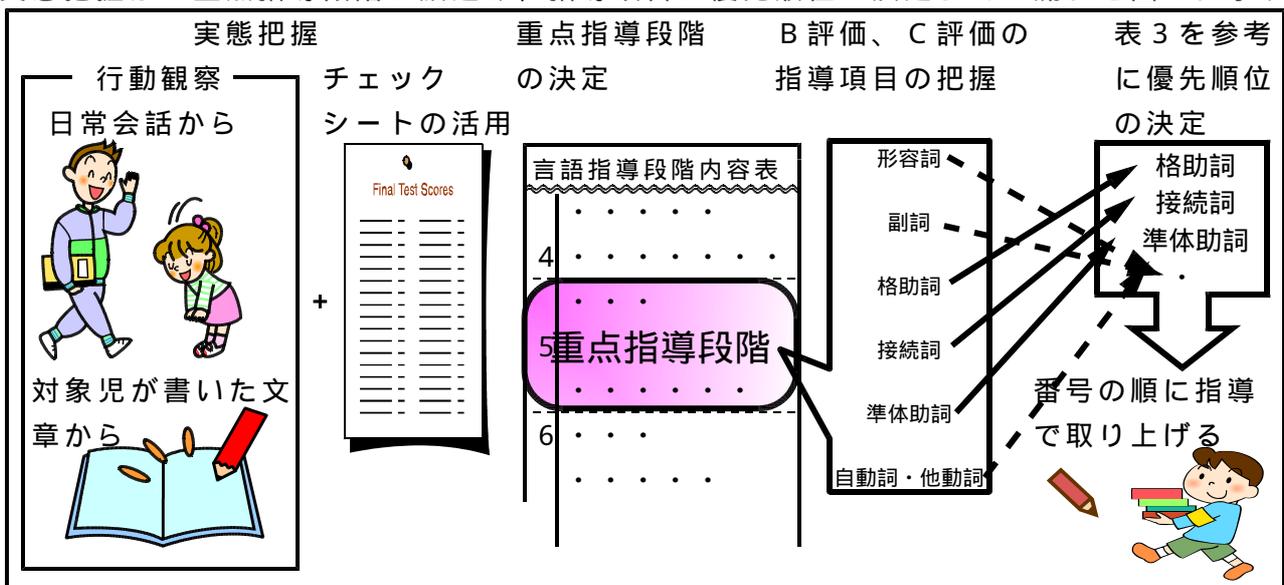
「表 - 3 言語指導項目と優先順位」

言語指導段階内容表の各言語指導項目には品詞名が記載されています。(表4参照)そこで実態把握を行い同じ評価になった指導項目については上記の表3を参考に指導で取り上げる優先順位を決めることが出来ます。掲載ページの欄はこの表を作成する際に参考とした文部科学省発刊の「ことばのべんきょう」における言語指導項目の掲載ページを示しています。

段階	項目番号・言語指導項目	品詞名	掲載ページ	評価
6	①だれが――している。なにを――している。 「わたしがたべている。」 「ごはんをたべている。」	格助詞	1年上 P72	A
	②なにか――した。なにを――した。 「ねこがおいかけた。」 「ねずみをおいかけた。」	格助詞	P73	B
	③なにを――。だれが――。どこで――。いつ――。	格助詞	P98	C
	④どんな――。 「あかいりんご」 「みどりのかさ」	形容詞	1年下 P4～ P9	C
	⑤――で――を――する。 「はさみでいろがみをきる。」	格助詞	P10～ P17	B
	⑥――がある。――がいる。 「きゅうにゅうがある。」 「おかあさんがいる。」	自動詞	P18～ P20	B

「表 - 4 言語指導段階内容表(6段階を一部抜粋)と実態把握結果の記入例」

実態把握から重点指導段階の絞り込み、指導項目の優先順位の決定までの流れを図1に示す



「図 - 1 実態把握から重点指導段階の絞り込み、指導項目の優先順位の決定までの流れ」

その2 対象児の実態把握に時間がかかりそうな場合（たとえば高学年）

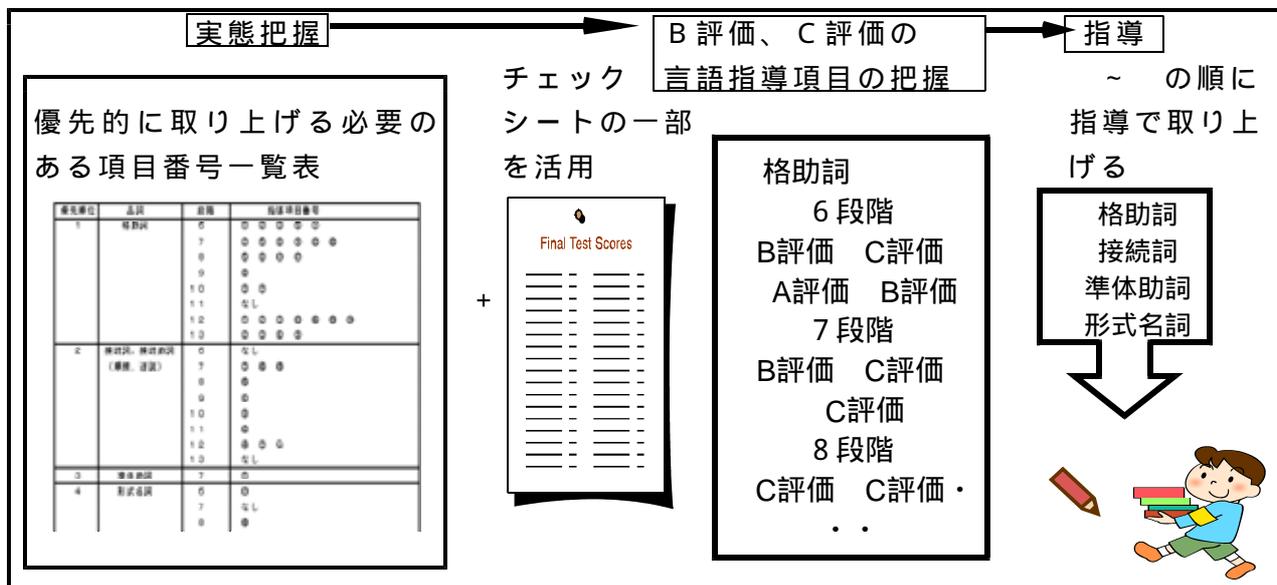
対象児が高学年で言語獲得が非常に遅れている場合、該当する段階からさかのぼって実態把握を行い重点指導段階を決定するまでに時間がかかることが考えられます。

そこで言語指導段階内容表の言語指導項目の内、指導において優先的に取り上げる必要のある、格助詞 順接、逆接の接続詞、接続助詞 準体助詞 形式名詞の4つに該当する言語指導項目の実態把握を優先させ、重点指導段階を設定しないで指導を行う方法も有効です。その際には言語指導段階内容表中の優先的に取り上げる必要のある ~ に該当する言語指導項目の項目番号を整理した表（表5参照）を参考に、項目番号の覧に記載されている言語指導項目について実態把握を行ってください。

優先順位	品詞	段階	項目番号
1	格助詞	6 7 8 9 10 11 12 13	なし
2	接続詞，接続助詞 （順接、逆説）	6 7 8 9 10 11 12 13	なし なし
3	準体助詞	7	
4	形式名詞	6 7 8 9 10 11 12 13	なし なし なし

「表 - 5 優先的に取り上げる必要のある項目番号一覧表」

上記の対象児の実態把握に時間がかかりそうな場合（たとえば高学年）の実態把握から指導までの流れを図2に示す。



「図 - 2 対象児が高学年の場合の実態把握から指導までの流れ」